

今月第17号は瀬戸山陰部岡山クラブの長壽 和子ワイズにご登壇いただきます。



EMCに思う

瀬戸山陰部岡山クラブ

ちょうじゅ やすこ

長壽 和子ワイズ

思い起こせば13年前、子どもへの虐待防止の運動である「オレンジリボン」の活動を始めたばかりの頃のこと、「長壽さんが今行っているオレンジリボンの活動を、話しに来てもらえませんか？」と声をかけていただきました。まだ始まったばかりのオレンジリボンの活動を知っていただける機会をいただいたと、喜んでお話をさせていただきにまいりました。会場に入るやいなや、「良くいらっしやいました。」「こんばんは。」「よろしくお願ひします。」と皆さんが笑顔で右手を差し出し握手をされるのです。その時の光景は、今でもはっきりと思い出されます。初めてお会いする方々が、旧知のともだちを迎えるように温かく、明るく、やさしく呼び入れてくださったのです。

なぜ13年前の思い出からこの文章を始めたのか・・・それは、その日がきっかけで私はワイズメンズクラブの一員となったからです。当時、岡山クラブには35名ほどのメンバーがおり、誰もが生き生きと活気に溢れていました。

現在、岡山クラブが所属する「瀬戸山陰部」は存続の危機に見舞われています。「米子クラブ」「鳥取クラブ」「姫路クラブ」「姫路グローバルクラブ」そして、「岡山クラブ」の5クラブは、それぞれの地域性や特色を活かしながら仲良く活動を続けてまいりました。

メンバーの高齢化と減少、それにより活動の幅が狭まったことが活発なクラブ運営を行いにくくしている原因の一つだと考えます。メンバーを呼び込むには生き生きとした魅力溢れるクラブでなければ、ワイズメンズクラブを知らない方にワイズメンズクラブに関心や興味を持っていただくことができないと思います。

昨年「神戸学園都市クラブ」とDBCを結んだことはクラブメンバーの動きが外に広がりクラブの活性化に繋がっていくものと期待しています。

私にとって、13年前のあの日がEMCの原点です。

クラブの居心地の良さはメンバーだけでなく、ゲストの方々にも居心地の良いものでなければなりません。笑顔と握手、温かい言葉かけがビジターの私にとって新鮮で、嬉しかったことを思い出し、「なんて居心地の良いところだろう、また来てみたい」の思いをゲストの方が持って下さることがEMCに繋がるものだと思います。

(岡山クラブ会長、西日本区元ファンド事業主任)